

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻		
指導教員	所属・職名		氏名		
	21世紀社会デザイン研究科・教授		中村 陽一 印		
自然・人文の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	個人	・ <input type="checkbox"/> 共同 4名
研究課題	条件不利地域におけるコミュニティ・ビジネス起業に向けて～佐渡相川町復興に挑む～				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻 1年		渡辺 啓嗣 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	① 21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻 2年	① 渡辺 啓嗣			
	② 21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻 2年	② 押切 ゆい			
	③ 21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻 2年	③ 佐藤 万里江			
	④ 21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻 2年	④ 山下 悟			
研究期間	2003年度		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、条件不利地域（佐渡島）において当該住民の自発性に基づいた持続可能な発展（内発的発展）が如何にして可能かを明らかにしようとするものである。その際、入会地慣行の残る佐渡後尾集落（旧相川町）を、コモンズ概念を用いて把握し、その変遷と現状を確認する。この現状を踏まえ、過疎化の進む地域の本質的な問題を見つめ、その解決に向けて、NPOによるコミュニティ・ビジネスを提案したい。そこでは、コミュニティ・ビジネスが如何にして成功するかを検証する。以上をもって当該地域の活性化の提案としたい。今後は、今回得られた知見を元に現地での実践に移ることとする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[コモンズ] [内発的発展] [コミュニティ・ビジネス]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、過疎地域での地域活性化が如何にして可能なのかということ明らかにすることを目的としている。

現在、日本における過疎地域は、集落の消滅という深刻な局面を迎えている。1950年代後半に高度経済成長期に入ると、日本社会の過疎・過密、そして地域間格差の問題は激しいものとなってきた。

これらの問題に対して、政府はその是正のために全国総合開発計画(以下、全総と略す。)を計画し、過疎地域対策緊急措置法を初めとする過疎法を施行した。しかし、これらは、地域活性化に繋がっていないとの指摘がなされている。ゆえに過疎・過密、地域間格差という問題は現在でも存在する。特に、過疎地域のなかでも離島などの条件不利地域は状況が深刻である。

農産物や工業製品を消費地域まで流通させることが難しいことから産業が発達しにくい。また若者が進学や就業のために都市圏へ移動することに伴う生産人口の流出していく。この二つの問題が、離島の産業衰退と人口減少をもたらす。そして島全体の活力が減退することにつながっている。

これらの問題を抱える条件不利地域における過疎問題の解決策を検討することは、日本における過疎問題になんらかの示唆を与えることができると我々は考える。

本研究では佐渡島をフィールドとして選んだ。佐渡島は離島という条件が付随している。ゆえに、政府と新潟県は離島振興法と全総(第五全総まで)を組み合わせながら、過疎対策を行ってきた。しかし、佐渡島における現状は、他の過疎地域同様に過疎化、高齢化、少子化、若者の流出といった問題が残存している。また、主要産業の一つである観光業においても不振が続いている。

しかし、金山やトキを代表とする観光資源がある。伝統ある能楽堂が約 30 箇所ある。味自慢の佐渡コシヒカリが獲れる。北雪、金鶴、真野鶴といった国内・海外からも評価を受ける日本酒を作る蔵がある。佐渡島には、人を惹きつける魅力があるのだ。それでは、何故このような魅力的な島に過疎化という問題が残るのであろうか。佐渡島をフィールドに選んだ理由はここにある。

研究方法は、合計 3 回にわたるフィールド調査(2003.8、2003.10、2004.12)における参与観察法、インタビュー調査法、及び文献調査を用いた。住民組織の形態や地域のcommons(自然資源の共同管理制度、および共同管理の対象である資源そのもの)における仕組みに迫った。また、NPO と企業とのアライアンスにおける可能性を考察した。そして、佐渡地域の内発的発展の可能性を探った。その際に、まずはアライアンスをその範疇に含む組織間協働の理論を整理し、佐渡島における NPO と企業とのアライアンスを事例研究した。

フィールド調査の回数が 3 度にわたったのは、第 1 回目の調査において、資料から得られるよりも詳細な状況把握が可能になったからである。そして、当初の計画より深い問題意識を得ることになったためである。

具体的には、住民と地域活性化を目的とした NPO との間に活性化に対する意識のギャップがみられること、人口流出の原因が必ずしも外的な環境によるものではないということ、2004 年 3 月 1 日付けで「市町村合併」が実施され、その「市町村合併」をめぐって地域住民の混乱があることが分かった。

この調査結果は本研究に、地域活性化の本質にせまる示唆を与えた。それは、上記に述べた 3 点のうち、活性化の意識の住民と NPO との間のギャップと人口流出の原因が、実は関連しているという点からだ。そして、そのギャップと人口流出の原因を解明するためにcommonsという概念を用いて検討する必要があるという示唆が得られた。

以上のように現状を把握し、次の 4 点の研究課題を設定した。そして、当該地域における地域活性化とその手段は如何なるものになるかということを検討した。

研究成果の概要 つづき

研究課題 1: 過疎・過密是正のために行政が行ってきた政策は佐渡を含む地域にどのような影響を与えたのか。また、どのような意味をもっていたのか?

研究課題 2: 対象地域(佐渡相川町後尾地域)におけるコモンズは如何なるものか?

研究課題 3: 対象地域(同上)のコモンズは形骸化しているのか?

研究課題 4: 佐渡島におけるコミュニティ・ビジネスとしての NPO と企業のアライアンスは、如何にして成功するであろうか?

研究課題 1 では、国レベルでの過疎・過密問題、地域間格差の是正のための政策的な流れと、佐渡島を含む農村の歴史的な位置付けとその従属的な性格を確認した。

中央集権体制において行われてきた国レベルでの地域活性化政策の限界から、分権化と同時に個々の地域が主体的に自立することが必要であると我々は考えた。ここで、住民の主体的に持続可能な社会を構築していくという内発的発展の理念の重要性が明らかとなった。

研究課題 2 では、周囲を自然資源に囲まれる後尾集落の自治組織、親族集団、年齢集団の運営や機能においてコモンズを確認した。これら 3 つの住民組織はいずれも集落の限られた資源を分配し、持続可能性を基礎としている。

現在までに、当該集落に見るコモンズを取り巻く環境は急激に変化した。たとえば、農業においては兼業化や機械化が進み、人力の集中投下を必要としなくなった。ゆえに、コモンズを土地を基礎とした意義や機能が因習化、形骸化したと我々は考えた。

また、コモンズにおける因習化・形骸化とともに、当該集落からの人口流出も進んだ。一方で、当該地域におけるコモンズ(共有資源を利用する上でのルール)は未だ充分な変更がなされていない。たとえば、コモンズは外部からの永住者を想定していないため、島外からきた人々(U・I ターン者)はコモンズから排除されることがある。だから島外からの人口流入は難しくなる。以上が当該地域におけるコモンズの現状であり、研究課題 3 によって判明したことである。

コモンズ(の資源分配制度)を理解しないままに、地域活性化を試みることは難しい。それは、トキ、能楽堂、日本酒といった資源をコモンズ理解なくしては活用できないし、島民との協働が可能にならないからだ。既存の地域活性化を目指した NPO と住民との地域活性化に対する意識に齟齬をきたしているのは、このコモンズを理解していないことであった。

そこで、新たな状況の定義(個人が自分自身の置かれた状況を知覚し、今までとは異なる新たな意味付けを行うこと)を与える主体として、コモンズを理解し、内発的発展に寄与する NPO を想定する。これが NPO によるコミュニティ・ビジネスである。

その場合、NPO が内発的発展に貢献すべく、如何にして活動を維持発展させていくのかを検討したのが研究課題 4 である。

ここでは、NPO と企業のアライアンスが有効であり、如何にして企業とアライアンスを始めるか、如何にして維持発展させるか、如何にして終わらせるかという仮説を、実際に佐渡島に存在する NPO (トキの田んぼを守る会) における事例により実証しようとした。

以上、本研究では過疎地域(佐渡島相川町後尾地域)の活性化がいかに可能かということのコモンズ概念と NPO と企業のアライアンスという二点の観点から検討してきた。

本研究で得られたのは、NPO と企業のアライアンスによって過疎地域の活性化の可能性の示唆である。この知見を活かし、NPO 設立に向けての準備を進めているところである。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 渡辺啓嗣、「若者は荒野を目指す」、『かがり火』99号、2004年、p.40

③ NPO法人21世紀社会デザインセンター主催、21sdcプロジェクト・フェスティバル 公開プレゼンテーション (2003年6月14日)「よってこいっちゃ」立教大学8号館 (8202)

④ 研究報告書「条件不利地域におけるコミュニティ・ビジネス起業に向けて～佐渡相川町復興に挑む～」作成、印刷。